おにをたいじする

　またまた素敵なお便りがコスモスハーモニーに届きました。
　紹介させていただきます。

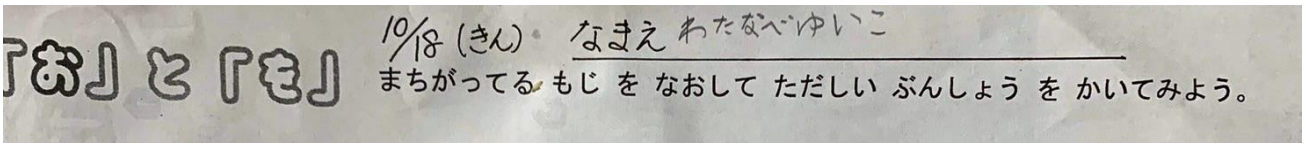
　昨日はオンライン授業で渡辺先生の深～い話を聞いた後、幸せになるためには何が大切かを紙に書くというのでうちの子は何を書くかと思ったら、授業の内容とあまり関係ない突拍子もないことを書いていてズッコケてしまいました。
　しかし本人はふざけているわけではないようだったので「先生の話をちゃんと聞いたのか？？」と思いつつ、この独特の発想も面白いので、大人になったときに本人に話してあげるために道徳の授業の内容と子どもの書いた作文を保存しておこうと思いました。
　山田先生のフィンランドの話での質問コーナーでも　「おばけはいますか？」　など他の子からも想定外の質問が出て、子どもの発想は面白いな～とつくづく思いました。

　ブータンではそもそも「いじめ」という言葉がないというのは本当にいい国だと思いました。
　国は違いますがタイ語にはそもそも命令形のような言葉がない（？）というようなことも聞いたことがあり「食べて！起きて！宿題して！」の代わりに「食べましたか？おきましたか？宿題しましたか？」のように言うらしく、タイは微笑みの国という理由がわかったように思えたのですが、今回のブータンの話でもそもそも言葉がないというのは国民性のようなものを表しているなあと思いました（幸せランキング急落の理由も知り、意外に芯はブレ易いともわかりましたが）。

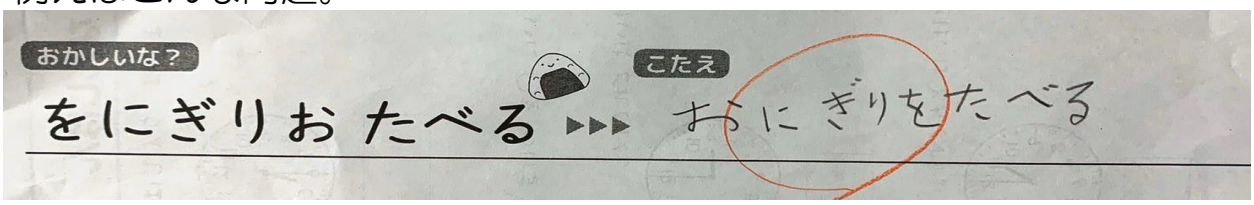
これは国民性なのか、文化なのか教育なのか、価値観の違いなのか、「幸せになるためになにが大切か」みんなのチャットの回答もいろいろあって、うちの子の珍回答もあり、多様性についても考えさせられました。

そういえば、『子どもの文化人類学』という本の中でカナダ北西部のヘアーインディアンという人たちは、子育てを娯楽の一種だととらえていて、子どもが近くにいてその様子を見るのが単純に面白い、楽しいため、子どもが大きくなり巣立つとまた別の子どもを養子として迎えてでも子育てを楽しむことがわりと一般的だと書いてありました（今現在でもそういう習慣や価値観を保っているかは分かりませんが）。
そういう意味ではいつも想定外の珍回答を出してくるうちの子は娯楽を与えてくれているとも思えるのかなと思いました。〃

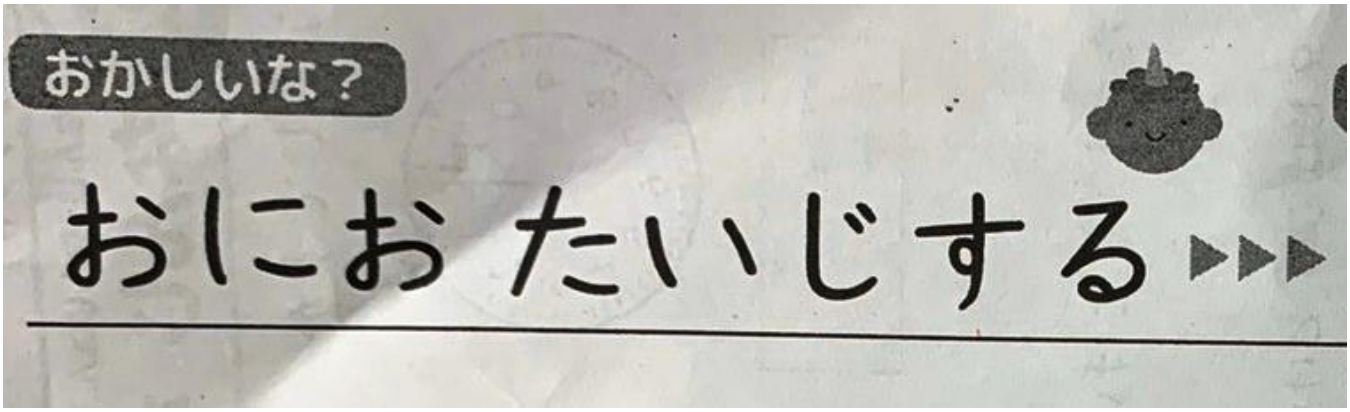
この前のオンライン授業のチャット欄は本当に面白かったですね。
普段授業で口々に子どもたちが話していると、その全てを拾うことはとても難しいんですが、それがチャットになると、ちゃんと順番に文字化されて表示されるので拾いやすいという利点が存在します。
それにしても、「おばけはいますか」のくだりはとても笑いました。
１年生の子たちの中で、ついこの前も「トイレの花子さん」の話が広がった時に、トイレに行くのが怖くなってしまった子たちが数人いて、事態の鎮静化に学年で努めた時がありました。
その時、２組の長谷川先生は
「学校を建てる時には、地鎮祭といってちゃんとお祓いがしてあるんだよ。だから花子さんはいないよ。大丈夫だからね。」
といって安心させてあげたそうです。
以後、１年生の中では「花子さん」には「地鎮祭」のくだりで対応することが一般化されました。
子どもの文化人類学の本もとても面白そうですね。
明日にでもすぐ読んでみたいと思います。
子育てにおいて、そんな風に「楽しむ気持ち」「見守るゆとり」はとても大切ですね。
私も４人を育てながら、そのことを強く感じます。
ふと、上の娘が１年生だった時のことを思い出しました。
こんなプリントを持って帰ってきたことがあったのです。



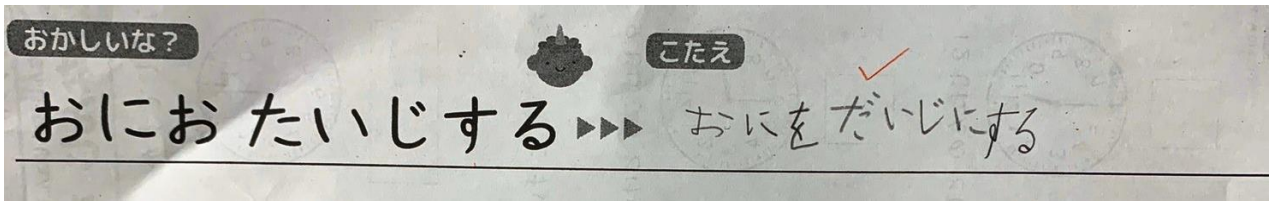
１年生のみんなも同じように学習をしています。
例えばこんな問題。



３～4 年生くらいになると、こうした問題を見たらみんなは笑うようになります
簡単だよね、と笑ってしまうわけです。
でも、生まれた瞬間からこのことを理解している人間はいません。
ということは、誰かが教えてくれたということです。
そして、出来るようになるまで、繰り返し練習させてくれたのです。
「それは誰なのかを少し、思い出してみましょう」と中学年～高学年くらいになった子どもたちにはよく尋ねます。
プリントには、先の「をにぎり」のような問題が続きました。
すると、娘が一問だけ間違えている箇所がありました。
この問題です。



どんな風に間違えたか、次のページを読む前に想像してみてください。
私が想像もつかないような間違い方をしていました。
まさしく珍回答です。
娘は、次のように回答していました。



妻と二人で大笑いしました。

そして、中々いい答えじゃないか、とも思いました。

当時の職員室で他の先生方にも伝えてみると、「優しさが窺えます」「素敵な回答」と褒めてくれたほどです。

そこから、ふと思い至りました。

「鬼」とは、いつから生まれたものなのか。

そもそも、どういう実体のものであるのか。

「鬼は外！」

「桃太郎の鬼退治」

「鬼に金棒」

「鬼上司」

などなど、身近によく聞く言葉ですが、その内情を知っている人はそれほど多くないでしょう。

例えば、「泣いた赤鬼」という物語があります。

４年生の道徳の教科書にも載っています

青鬼と赤鬼の美しい友情が描かれている作品です。

ではなぜ、鬼は色分けされているのでしょうか。

疑問に思ったことがある人はいないでしょうか。

すくなくとも、私は疑問に思いました。

そこで、調べてみました。

代表的な鬼の色は５つあるそうです。

なぜ、５つかというと、仏教において瞑想修行を邪魔する ５ つの煩悩（障害）があります。

これを、五蓋（ごがい）といい、５色の鬼たちはそれを表しているとされているのです。

紹介します。

- 赤鬼｜貪欲（とんよく）……渇望・欲望
- 青鬼｜瞋恚（しんに）……怒り・憎しみ
- 黄鬼（白鬼）｜掉挙・悪作（じょうこ・おさ）……心が落ち着かないこと・後悔

- 緑鬼｜昏沈・睡眠（こんじん・すいめん）……倦怠・眠気
- 黒鬼｜疑（ぎ）……疑い

簡単に言えば、いわゆる「負の感情」と呼ばれるものが、鬼の実態です。

鬼は、物語の中にいるのではありません。

鬼は、人間の心の中にいるのです。

ここまでを読んで「あっあの作品」とピンときた方もいるかもしれません。
「インサイドヘッド」という映画をごらんになったことがあるでしょうか。
アメリカのピクサーが制作したアニメ映画です。
最初に娘と映画館でこの作品を見た時、私は強烈な思いに駆られました。
「クラスの子たちに、この映画をぜひ見せてあげたい。」
アニメ映画を見た直後にこのような感想を抱いたのは、初めてのことでした。
特に小学校高学年段階において、教育的価値の高い作品だと思ったのです。
簡単に言うと、作品のテーマは「感情の役割」です。
喜び。
悲しみ。
怒り。
恐れ。
嫌悪。
この５つの感情をキャラクター化したものが、この映画の主人公です。
まるで、先に紹介した５色の鬼のようにも思えました。

近年、「レジリエンス」という言葉が、注目されています。
レジリエンスとは、「復元力」「逆境力」とも訳されるように、困難に際した際に発揮するしなやかな心の強さを指す言葉です。
こうした言葉に注目が集まるようになった背景として、困難にめげやすい、心が折れやすい、そうした人が増えてきたことが挙げられています。
まさに、心の中にいる鬼の暴走を止められない、制御できないような姿を指しているともいえるでしょう。
心の動きを指す言葉で、他にも「ポジティブ思考」というものもあります。
大変美しい言葉です。
が、その美しさが悲しみや恐れといった一般に「負の感情」と言われる部

分を否定してしまう向きがあることも否めません。
　しかし、全ての感情には大切な役割があります。
　ある著作から、抜粋します。

「こんなふうに感じるなんて、自分が弱い証拠だ」と思う人もいるかもしれません。前向きに生きたいと思って、マイナスの感情をなくさなければ、と頑張っているひともいるのではないでしょうか。 　でも、どんな感情にも、きちんとした役割があります。（中略） 　「熱い」という感覚がそうです。何かを触って「熱い！」と感じるから、手を引っ込めるのですよね。もしもそこで熱さを感じなかったら、いつまでも熱いものを触り続けて、やけどをしてしまうでしょう。 　こんなふうに、感覚自体はイヤなものだけれど、結果として体を守ってくれるのが、痛さや熱さなどの「イヤな感覚」なのです。感情についても、まったく同じことが言えます。

　つまりは、悲しみ・怒り・恐れ・嫌悪などの一般に「負の感情」と言われる部分にも大切な意味があるということです。
　これは、シンプルなようで結構見逃されがちな視点です。
　必要のない力を、人間が与えられているとは考えられません。
　きっと何らかの意味があります。
　きっと何らかの価値があります。
　そうした感情がなぜ存在するかを考えるようになると、自分の感情との向き合い方や乗り越え方のヒントにもなっていくはずです。
　負の感情が、いわゆる煩悩が「鬼」。
　仏教では、「修業の邪魔をする」とも言われている「鬼」。
　では、その鬼の役割とは一体何なのでしょうか。
　色んな答えが浮かびそうです。
　私がすぐに浮かんだ答えは、次の２つでした。
　１つは、「心を守る」ため。
　人は恐れるから、自分にとっての安全な場所を求めます。
　人は悲しむから、悲しみを癒してくれるものを求めます。
　負担がかかり過ぎると心が壊れてしまうことがあるからこそ、その心を守るために“鬼”は存在するのだと思います。
　先のインサイドヘッドには、共に悲しみ、共に涙することで心が癒され、浄化されていくシーンが描かれていました。

負の感情にも、やはり大切な役割があります。
そして、もう１つの答えが、「心を磨く」ため。
“鬼”が登場しやすい、幾つかのケースで考えてみます。

・「意見の合わない人と出会った。」

自分の考えに合わないから、その人を除外し攻撃していくのか。
それとも、違いを受け入れた上で手を取り合う道を探るのか。

・「前にあったことが中々許せない。」

過去の出来事をいつまでも根に持ち、恨み続けながら生きていくのか。
それとも、過去を乗り越え相手を許し、次なる未来を見ていくのか。

・「苦手なことにぶつかった。」

出来ないことを周りや他人のせいにして、努力をあきらめるのか。
それとも、自分自身の足りない所を顧みて謙虚に努力を続けていくのか。

・「周りの人の欠点が目に付く。」

欠点や短所ばかりを見て、陰で悪口を吐き続けるのか。
それとも、その人の良い所を見つけ、感謝や希望の言葉を伝えていくのか。

・「ついつい自分中心に考えてしまう。」

自分のことばかりを考え、好きなことばかりして生きていくのか。
それとも、誰かのために動き、誰かを支え、誰かを助けて生きていくのか。

・「思い通りにいかないことがある。」

ふて腐れて周りに当たり散らし、簡単に放り出すのか。
それとも、あれこれ試行錯誤して壁を乗り越えようとチャレンジするのか。

怒り続けていた人が、怒りを乗り越えられるようになった。
びくびく恐れていた人が、勇気を出して一歩を踏み出せるようになった。
ずっと許せなかった相手を、許すことができた。
自分の中にいろんな「鬼」がいるからこそ、その鬼と向き合い乗り越えようとするからこそ、我々の心は日々磨かれていくのだろうと思っています。
１年生においても、内なる鬼を暴走させる子は激減しました。

必要以上に怒ったり、必要以上に悲しんだりすることが減り、少々の出来事ではうろたえないくらいのたくましさも磨かれてきたと感じています。
それはきっとみんなが色んな負の感情と向き合い、乗り越えようと努力する中で心を磨いてきたからだろうと私は思っています。

節分では「鬼は外 福は内」という掛け声が一般的ですが、地域によっては「鬼は内 福は内」という掛け声で豆まきが行われているところがあります。
鬼も大切なものとして、呼び込んでしまうのです。
他にも、「鬼の宿」という鬼を迎える神事を行う地域があれば、「鬼瓦」のように家の守り神として扱う文化も日本にはあります。
邪悪なイメージが強い「鬼」ですが、我々の心を守る上で、あるいは磨く上で、大切な役割がきっとあるのでしょう。
娘の書いた「おにをだいじにしよう」から、こんなことを考えたわけです。

子育ての中でもいろんな気づきのヒントやチャンスが眠っていることを改めて思い出しました。
今回も素敵なお便りをありがとうございました。（渡辺道治）

1学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ (google.com)